



TITLE:

胃癌の骨盤腔転移による尿閉例

AUTHOR(S):

加藤, 篤二

CITATION:

加藤, 篤二. 胃癌の骨盤腔転移による尿閉例. 泌尿器科紀要 1971, 17(12): 773-774

ISSUE DATE:

1971-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/121326>

RIGHT:

胃癌の骨盤腔転移による尿閉例

京都大学医学部泌尿器科学教室

加 藤 篤 二

URINARY RETENTION DUE TO METASTATIC PELVIC TUMOR FROM THE STOMACH

Tokuji KATō

From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyoto University

A 54-year-old man was admitted because of urinary retention. A hard mass was palpable in the lower abdomen. The patient died of general deterioration.

Autopsy revealed gastric cancer which had been asymptomatic and metastatic tumor in the pelvis. There were also metastases to the lung and liver.

はじめに

胃症状を欠く患者で尿閉をきたし、入院3週間で死亡、剖検によって胃癌が認められ、骨盤腔の転移腫瘍のため、排尿障害を招いたと思われる症例を記載する。

症 例

患者：54才の男，初診 1955年10月8日。

主訴：完全尿閉

既往歴：特記すべき疾患はない。

現症：初診の約1カ月前より排尿困難を訴え、漸次増強して15日前より完全尿閉となり、医師によりネラトンカテーテルの導尿をうけるに至った。1週間より連日高熱をきたし朝になると下熱するという。その他6カ月前より両下肢の神経痛を訴えているが歩行障害はない。胃腸症状としては軽度の食欲不振と便秘以外悪心、嘔吐、吐血、下血等は全く認めなかった。

所見：体格は中等度でいさうし貧血あり。胸部に著変なく、腹部で腎は両側とも触れず、下腹部は膨満し、導尿により膀胱上部に硬結を認めた。外陰部で陰茎、睪丸、副睪丸、精管はいずれも異常なく、前立腺は触診上両側とも弾力性に腫大し、その上方に硬結がみられた。下肢は両側とも知覚鋭敏で浮腫があり、膝蓋腱反射欠如、アキレス腱反射欠如、膀胱鏡検査では粘膜は一般に正常で腫瘍と思われるものなく、後三角部に砂様の塩類沈査を認めた。青排泄左は6分(++)、

6分50秒(++)、右は7分20秒(+)、9分10秒(+)、尿管カテーテル尿で左は蛋白(±)で他に異常なく、右は蛋白(+)、赤血球8~10、白血球5~8、上皮(+)、大腸菌(++)。腎盂レ線撮影で両側の排泄はほぼ正常で水腎像の所見はなかった。膀胱部レ線像で仙骨の破壊像を認めた。尿はほぼ清澄であるが検鏡上赤血球3~5、白血球5~10、上皮(+)、血液像では赤血球数 290×10^4 、白血球数16500、血色素80%、ヘマトクリット37%、血圧は150/100。

入院後の経過：入院時一時ショック状態になったため応急処置をおこない回復、膀胱内造影剤注入により膀胱は右上方より下方および前方に変位を呈すなわちDouglas腔に腫瘍のあることを推定せしめたが急速に増大し全身衰弱強く、持続導尿と対症療法にかかわらず10月28日意識喪失して死亡した。

剖検記録：腹腔内には腹水なく、大網小網異常なし。胃の内景では粘膜淡赤で皺襞は伸展し出血斑はない。噴門部より1.5cmの小彎に沿い小指頭大の潰瘍1コがみられ、それを中心に周囲3.5cmにわたり、扇形に軽度の隆起を示した。該部漿膜面に接するリンパ節の小豆大に腫脹するもの10数コあり。脾、脾ともに異常なく、肝は800g、十二指腸、小腸、大腸、直腸は全く正常、腎は両側ともやや萎縮し、90gで著変なく尿管も左右肥厚なし。骨盤腔では大動脈分岐部の下に中央よりやや右より下方に至るほぼ球形で縦8.5cm横8cm厚さ6.5cmの灰白色の腫瘍がみられ後方の骨とは癒着するも膀胱、直腸とは癒着せず、前立

腺は腫大がみられた。胸腔で左肋膜に線維性癒着と肺尖部に小指頭大の硬結あり、右肺上葉近く肋膜の肥厚がみられた。心臓は異常なし。組織学的に胃の原発巣と思われるものは腺癌像を呈し、筋層より漿膜まで浸潤し粘膜下層に沿って周辺に拡大している。両肺野の硬結部は結核像のほかに腫瘍細胞巣が認められ、肝にも同様組織学的転移があった。骨盤内腫瘍は胃病巣と同様の腫瘍細胞が著明に増殖し骨では仙骨、腸骨、第5腰椎まで破壊が肉眼で認められた。

ま と め

本例を総括すると、排尿困難、尿閉を主訴とした54才の男で骨盤腔の腫瘍が原因と想定されたが全身衰弱で死亡、剖検によって胃に無症候性の癌が潜在し、それによる Schnitzler の転移によることが判明した。

膀胱後腫瘍としては原発性のものとして肉腫が大部分であるがいずれにしてもきわめて少なく、多くは二次的で子宮、直腸、骨よりのもの

である。著者は前回食道癌による症例を報じたが、胃癌に由来するものは多い。胃癌が進展して摘出不能になった時点での転移統計では星野によると Douglas 腔が圧倒的に多い。本例ではすでに隣接の骨を侵しているが、尿管は両側ともほぼ正常で膀胱は形態的に右上方より圧排されており、したがって排尿障害は腫瘍の圧迫に加えて、後膀胱神経侵襲によるものである。いずれにしても本剤は生前胃症状を欠いていたため原発の胃癌が発見されず骨盤腔の腫瘍による排尿障害が主体をなした点が特異であった。

文 献

高安・ほか：日泌尿会誌，47：689，1956.

高安・ほか：癌の臨床，10：120，1964.

加藤：泌尿紀要，17：195，1971.

星野：日本臨床，20：2083，1962.

(1971年11月15日超特別掲載受付)